

社会科学部学生論文集の刊行によせて

早稲田大学社会科学総合学術院長 畑 恵 子

ここに「学生論文集」を刊行し、2012年度の社会科学部生の研究活動をご紹介できることを大変うれしく思います。本号には21本の論文と1つのシンポジウム報告が掲載されています。論文を活字にして多くの人々の評価を問うことは、自分が考えたこと、執筆した内容に責任を負うことであり、単にレポートや卒論を書くこととは次元の異なる行為です。読みごたえのある論文を完成させた努力と、それを広く読者に伝えようと決断したチャレンジ精神に敬意を表します。

本号に収められている論文は、環境・エネルギー・産業間の関連、グローバル化と企業戦略、法からみた日本社会、日本人の価値観、思想・哲学など、テーマが多彩であるばかりか、現実と深く関わる問題に切り込んでいます。社会科学部では3つの理念、「学際性」「社会性」「国際性」を掲げて教育・研究を行ってきましたが、これらの論文を一読すると、学生のみなさんがそれを理解し咀嚼して、知的活動を展開していることがよくわかります。

つい最近、ある新聞に「大学生が主体性を失っている」と題する記事が掲載されました。昨年11月に民間企業が行った5000人の大学生を対象とした調査結果において、「あまり興味がなくても単位を楽にとれる授業がよい」、「単位をとるのが難しくても興味のある授業がよい」という二択の質問に対して、前者の回答が54.8%を占めたこと（2008年よりも5.9ポイントアップ）、「演習形式よりも講義形式を好む」とする回答が8割を超えたことが紹介されていました。社会科学部でも「楽勝科目」が学生の関心事であることは残念ながら事実のようですが、私は記事とは異なる学生像を抱えています。なぜなら、演習で自分のテーマに取り組む学生たちは意欲的で主体的であり、演習が「社生らしい」発想や視点をはぐくむ場になって

いるように思われるからです。社会科学部ではゼミが必修ではありませんが、大学で学ぶことの醍醐味はゼミにあり、学びの中心に、学生生活の中心にゼミをおいてもらいたいと私自身は願ってきました。そして実際に手ごたえも感じています。

「社会学らしさ」を自嘲的な意味合いで用いる学生も一部にいますが、自信をもって誇るべき「社会学らしさ」、「社会学の個性」もあります。それは、社会を批判的かつ建設的に考察し、望ましいあり方を構想し、そのために行動する力、とまとめられるかもしれません。その「社会学スピリット」は本号に掲載された論文およびシンポジウム紹介にもよく表れています。「震災後の社会と学生の可能性」と題する院生を中心としたシンポジウムは、院生が立ち上げた研究会活動、そこから広がったボランティア活動などがベースになっています。3.11は日本社会に生きる私たちがこれから生涯を通して考えていかねばならない課題を残しました。社会学研の院生たちがいち早くそれを自分自身の問題として捉え、そこから何を学べるかを考えたことに、称賛を送りたいと思います。院生と学部生は同じ学びの場にながら、普段はほとんど接触がありませんが、この報告は大学院生から学部生に送られたメッセージといえるかもしれません。

社会科学部の学生が、これからもさまざまな機会を活用して、「社会学らしい学び」を深めてくれることを期待しています。

最後になりましたが、ご指導くださった先生方に御礼申し上げます。多くの論文が掲載された本号の編集作業には大変なご苦勞が伴ったことと思いますが、北村能寛先生がその勞をお取りくださいました。心から謝意を表します。